

～12年の周期がある。

文 献

- 1) 中田良雄 (1959): 新潟港の海面上昇について, 研究時報, 11, 149～152.
- 2) 宮崎正衛 (1953): 年平均潮位の永年変化について, 中央気象台海洋報告, 3, 55～66.
- 3) 松本貞行 (1962): 西日本における潮位の周期的

変動について, 海と空, 38, 48～52.

- 4) 佐野凌一 (1952): 年平均潮位の fluctuation について, 地震 2 輯 5 卷 4 号, 8～12.
- 5) 函館海洋気象台 (1961): 洋軽海峡観測 15 年報第 1 部, 函館海洋気象台要報, 8, 11～36.
- 6) 函館海洋気象台 (1961): 北海道返海の海洋, 海上気象の特異性について, 函館海洋気象台旬報, 1961年, 207.

Sir David Brunt 逝く

“Physical and Dynamical Meteorology”の著者として、わが国の気象学界にも広くその名を知られていた D. Brunt は1965年2月5日に78才で逝去された。1886年6月17日ウェールズのステーリトルで生れ、ケンブリッジ大学で勉強した。最初は体天物理関係の論文を書いていたが、ことに観測結果の解析整理に大きい関心を持ち、1917年には“*The Combination of Observations*”を出版した。これはその後版を重ねて永く役に立った本である。

1916年第1次世界大戦の勃発とともに気象局に入った。この後彼の興味はすべて気象学に転じた。大戦後は気象局の軍用気象部の責任者となり、大気乱流と拡散の有名な研究グループの育成に貢献した。1920年 Sir Napier Shaw が気象局長を退いてイムピリアル・カレッジの教授となった時、そこの講師として協力した。そ

こでの講義がもとになって“*Physical and Dynamical Meteorology*”が1934年に出版されたのである。

1920年代の初めから1930年代のころまでは、最も活動的な時期であった。ピリオドグラム解析、気象系の運動エネルギーの消失時間の推異、変動する気圧場に対する風の順応について論じ、また Simpson の放射論を発展させた。

1934年にイムピリアル・カレッジの正式な気象学講座の担当教授となった。そして戦後には気象学科の充実に努力して、現在見るような各方面の研究者を集めた立派な学科を作り上げた。1952年その教授を退いた。

彼は1939年に F.R.S. となり、1948年から1957年までは理学部門の幹事として、英国の IGY への協力体制を作ることに熱心だった。(岡山久尚)

Sir Edward Appletou 逝く

電離層の研究で有名な Edward Victor Appletou は1965年4月21日に72才で死去された。Appletou は1892年9月6日にヨークシャーで生れた。ケンブリッジ在学中に第1次世界大戦に従軍したが、戦後キャベンディッシュ・ラボラトリーに戻った。彼の学才は万人の認めるところで、32才の若さでキングス・カレッジの物理学教授となった。ここでそれからのみりの多い12年間を過ごし、1936年には C.T.R. Wilson の後継者としてケンブリッジ大学の教授に移った。1939年から科学技術庁の長官となり、大戦中を通してこの重大な責務を果たした。そして1949年にエジンバラ大学の総長として、再び学問の世界に戻った。

1901年にマルコーニが最初に大西洋横断の無線通信に

1965年12月

成功してから、1年経てヘビサイドとケネリーの2人が独立に、高層大気中に電気伝導性の層があるために地球の曲率が影響するような遠距離にまで電波が届くのだらうと示唆した。これをすぐれた方法で実験的に立証したのが Appletou である。そして現在電離層と呼ばれているものの電氣的構造と、それと電波との関係をその後多年にわたって研究した。電離層が E 層 F 層から成り立つことを発見したのは1925年であった。レーダーの最初の開発もまた彼の仕事である。彼は URSI (国際電波科学連合) や IGY でも重要な役割を演じた。1947年には電離層の研究でノーベル物理学賞を受けている。

(岡山久尚)